
「愛してる」を言い訳に

黒木 ユチ梨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「愛してる」を言い訳に

【Nコード】

N48550

【作者名】

黒木 ユチ梨

【あらすじ】

一女性を中心に繰り広げられる恋愛物語。

繊細・大胆・大人・幼稚・女心・悦楽・落胆・別離。。。

あらゆる視点から、どこにでもいそいでいない女の本質に迫ります。

プロローグ

いつだってそうだった。

何の気なしに出向いた所で、何の気なしに『今夜のフィーリング・
・』と、視線を向けた。

別に異性に限った事ではないが、同姓とあまり親しくなれない自分の視線には、余程目立つ存在の同姓しか目に入ってはこなかった。

傍^{はた}から見れば、私は恋愛上手なのかも知れないと、時々思う事がある。

だけど、決して自負しているわけではない。

その時の勢いに感性を任せているだけなのだろうと、この頃は気付いている。

その確たる根源は私が^{おの}自ずから作り出している『ほろ酔い』だから。

複雑海峡を真つしぐらに、それも、とことんと泳いできている。

えっ、「好きなタイプ？」

「仕事、してる人」

こんな、およそ筋違いとも言えるセリフをいとも簡単に口に出せる自分。でも、私唯一の最低条件だった。

そして、私の鉄則。

『好きな人が出来たから、今の彼と別れよう。』

《私》なんて人間は、どこにでも存在している。《私》がいなくなつて、あの人は平気だ。

そもそも《好き》・《恋》・《愛》の区別を簡単に付ける事が出来

るなら、弟子入りでもお願いしたい位だ。

一人暮らし

8月も終わりに差しかかっていた。

朝早くから玄関前には2tロングのトラックが横付けされ、家の中は至る所に毛布が敷かれていた。

汗まみれで動き回る作業員たちに愛嬌を振り撒きながらも、私の口調には明らかに棘があったに違いない。

壁や天井にも注意してよね！

傷でもつけようものなら、あの人の冷たい視線をまた浴びなきゃいけない

私は長年暮らした家を今日引越す。

離婚するのだ。

もともと、心も体も半年くらい前からずっと別居していたと言っても良いほど、互いに無関心を装っていた。

装っていたというのは、実の所見せかけに過ぎず、あの人の感情を言い換えるなら『無視』。私の場合においては『現実逃避』と言ったところだろうか。

あの人とは主人のこと。前原 健吾^{まえはら けんご}。56歳。

私の名はひかる。44歳。今はまだ『前原』^{まえはら}だけど、明日からは旧姓の『琴野』^{ことの ひかる}。晴れて琴野^{ことの}ひかるに帰れる。

離婚届を出したらこのモヤモヤした気持ちも治まるでしょう・

こんな心機一転の私にも、悩みはある。

来月の15日で、職を失ってしまうからだ。

12年間、ずっと主人の会社で勤務していたけど、離婚後も続けられるとは思っていなかった。

だけど、もし、あの夜、もしも

「仕事はどうするの？」と、聞かれていなかったら、酔った勢いで早口の私も翌日には冷静になって少しは考えたのかもしれない。もし、翌日に聞かれていたなら

「続けられるのなら、お願いしたい。」なんて、神妙な面持ちで答えたのかもしれない。

今の時代に、40過ぎの何の資格も持っていない女が、簡単に希望する就職先なんて見つかるはずがないのに、『石橋を叩かず突っ走る私』。今迄、何度か後悔したけど、やっぱり今回も『石橋を叩かず突っ走った』。

でも、酔ってなきゃ

「離婚して下さい。」の一言も言えていなかったはず。

ほんの10日前の深夜の出来事。分岐点を作ったのは他ならぬ私。そして、これが二度目。

もう結婚は懲り懲り。

暫くは貯金でなんとかなる。生活の事は一旦措いといて、まずは休息だ。

新居のマンションに荷物をすべて運び終えたら、既に辺りは薄暗くなっていた。

1Kの部屋はベッドと段ボールが占領し、本来、数歩しか必要としないベランダのサッシ迄にも大回りをしなければならなかった。

全開だった窓を閉め、エアコンのスイッチを押した。

やっと、暑かったことを思い出したなんて・・・

一人っきりの部屋で微笑む自分に、可笑しくなった。そして、次にはため息が出た。

自由になった安堵と自由が故の不安。正反対の感情なのに、ため息は一つ。

さあ、ひかる、気を取り直して！

ベッドメイクだけ済ませて、飲みに行くぞ！

帰ってきたらすぐ寝てしまえるように・・・

シャワーを浴び、メイクを施し、『衣類』と書かれた段ボールからTシャツとGパンを出して身に付けた。

見慣れない部屋、見慣れない玄関、まるで照明を落としたら二度と戻らない気がした。

一人ぼっちは大嫌い。

明るくなるまで飲んでいよう。

夜が明ければ、もう怖くない。

埋め合わせ

歩みを進めた先は、新居から3分と掛からない居酒屋だった。

夫婦間の冷めきった頃から通い始めたのだから、もう半年が経つ。週に2〜3度は暖簾をくぐる、いわゆる『常連さん』と化していた。

ちよつと重たい木の引き戸を勢い良く開き、今夜はいつも以上に陽気なフリをして店内に入った。

「お晩です〜！」

「何だ！また来たのか！」いつもの口癖。この店の大将おかもとの岡本よ耀うじ司。58歳。

口は悪いし、態度もデカイけど、みんなこの大将の人柄が好きで通う常連ばかりだ。

「お〜、待つとつたんよ！ぴかっち。ま、ま、こっちに座りなさい。

「常連の通称『善ちゃん』」。

この店に初めて入った時、真つ先に声を掛けてくれた1つ歳下の関西人。都会の居酒屋の店主を『大将』と呼ぶきっかけも、善ちゃんが発端だったらしい。

ちなみに、私のあだ名である『ぴかっち』も、この善ちゃんによって付けられた。

いつだって、相手の事なんてお構いなしに、マイペースで面白おかしく事を進めちゃうけど、なんか憎めない。

普段無口な私もここに来ると饒舌になる。それもこれも、言わば善ちゃんが早々とあだ名をくれた事によるのかも知れない。

長めのカウンター席の一席を勧められ、善ちゃんの隣に座った。

「いらつしゃ〜い。今、みんなでぴかっちの噂、してたところなの。」
温かいおしぼりとグラスや氷を持って、ママが来た。

「ありがと。何、噂って・・・」受け取ったおしぼりで手を拭きな

がら聞いたけど、何の話かなんて一目瞭然。離婚の事も、今日の引越しの事も既に話していたのだから。

何を頼まなくとも、勝手に料理が出てくる。裏メニューや多少無理とも思えるリクエストに、苦虫を潰したみたいな顔になりながらも応えてくれる大将が、今の私のお気に入り。

そう。離婚を切り出す前に用意した『好きな人』。いつもの私の鉄則。

芸能人なんておおよそ遠い存在の相手に、本気で心ときめかせられる程、若くも清纯でもない。身近な所に相手を感じる方が、淋しがり屋の私には似合っていた。

今夜は、私がいつも以上にピッチを上げて飲んでいても、くだを巻いていてもみんな笑って許してくれた。だけど、心の中はからっぽ。

これを、虚しいというのかな・・・

閉店時間を期に、私も店を後にした。

帰り道の重い足取りはどうしても我が家に向かず、家とは反対方向に踵を返すと、携帯のアドレス帳を片っ端から覗き込んだ。

現状を忘れない・・・

今の私を呑み込んでくれる人

そして、『絶対条件』。全てに於いて安全な人

僅かな登録件数の中から、ようやく一人の人物を見つけ、発信ボタンを押した。

4回目のコール音の途中で相手の声。

「どうした？」

斉藤 知也。私より一つ上の45歳。

若い時分の仕事仲間。と言ってしまうえばそれまでだけど、去年の春、幾夜かを共にした。

別に愛情などというものがあつた訳ではない。

世間でいわゆる『情事』・『火遊び』と言つたところか。

「逢いたいんだけど・・・」少し間があいた。自分の鼓動が聞こえてきそうだった。

「近くに付いたら電話して。」

「うん、わかった。」

これである暗がりには帰らなくて済む

タクシーに乗り込み、高速道路を飛ばして貰つた。首都高のきつめのカーブをあつという間に通り越し、『埼玉県』の文字を目にした頃には穏やかな直線が続いていた。街の灯りはその殆どが翳を潜め、道路を照らす照明がくつきりと浮かび上がり、その役目を確実に果たしていた。

高速道路を下り、次のルートを指示しながら、私は握りしめていた携帯電話のリダイヤル欄を出した。再び発信。

「もうすぐ着く。」

「わかった。」

待ち合わせ場所はいつも決まっていた。指示が入らない限り、あのスナック。

店の外にいなければ、中で飲んでいる。

知也の車を見つけ、タクシーを降りた。ハイエースワゴンの助手席ドアに手を掛けると温かい。

ずっと走らせていたんだ・・・

「久しぶり。」

「ああ。」相変わらず無口だ。飲んでないってことは、いつも以上に無口なはず。

まつ、いいか。夜中にいきなり電話したのに、逢ってくれただけでもよしとしなくては。

車を走らせること5分。派手さを抑えたシルバー系のネオンサインのホテルに入った。

ここも、毎回同じ。さすがに部屋までとはいかないけれど。

冷蔵庫を開け、サワーの缶を2本取り出した。

「お疲れ〜」

「うん」

なんか、照れくさい。私がそうなのだから、知也は余計か・・・

会話は殆どない。甘い囁きも、感度の良さも、笑顔すら・・・

それでも、最後の最後に落ち着いて眠ってしまうのは、ずっと抱き締められたままだから。

本当はメチャメチャ優しいの、知っている。

甘えたい時は無理でも、私がどうしようもない迄に落ち込んでいる時は絶対『NO』とは言わない。

その時だけは、例えば私が『厄介なひかる』であっても

朝6時半、ホテルの電話のアラームで目が覚めた。

知也の腕をそつと外し、洗面所に。いつもそうだった。私が身支度を整え終えてから知也を起こす。女と違って男の支度なんて10分と掛からない。

近くの駅迄送って貰い、別れた。

もう、次にこうして逢うことはないだろう・・・

予感なのか、直感なのか、或いは決意なのか。
定かではないが、それでも、ふとそんな気がした。

心に空いた穴は、いつとき埋める事が出来た
そのうち、きっと一人にも慣れるだろう

でも・・・当分の間、朝まで起きてる日々が続きそうだ

追憶(1)

JRから地下鉄に乗り換え、駅から徒歩8分。
ようやく新居に辿り着いた。

タクシーで帰ろうかとも思ったが躊躇した。

夜中、酔った勢い任せに支払う高額なタクシー代を、朝のラッシュ時にまで応用させる気には到底なれなかったからだ。

マンションの階段を上ろうとして、一匹の猫を発見した。

首輪が付いている所を見ると、隣家の飼い猫なのか。家の前の小さな日陰で背中を丸め、地面にペタンと座り毛づくろいをしている。

キミはのんびりでいいね・・・

私はこれから大忙しなんだ・・・本当に猫の手も借りたい位だよ！

ゆっくりと歩みを進め、あと2メートルという辺りで私に視線が向けられた。暫くお互い身動きせず見つめ合っていたけど、結局、路地に入って行ってしまった。

ちよっと挨拶しようと思ったただけなのにな・・・

昨夜の『帰りたくない病』は、少なくとも今現在はない。

3階まで、一気に駆け上がり、荒い呼吸を鎮めながら玄関のドアを開けた。

カーテンの閉ざされた部屋は薄暗く、しかも、窓を閉め切っていたせいで空気が淀んでいる。

相も変わらず、大回りをしてベランダのガラス戸を開けた。

早く、この段ボール達をやっつけなくっちゃ！

山積みになっている一番上の段ボール箱を一つ持ち、床に置いた。

駅からの途中、自販機で買った缶コーヒーを鞆のポケットから出してその上に置き、今度は鞆のチャックを開けて煙草ケースを取り出した。

灰皿は昨日からシンクに置きっ放しで、数本の吸い殻が入っていたけど別に構わなかった。

どうせ、一人つきりなんだから

段ボール箱の脇に腰を下ろし、コーヒーを一口啜り、煙草に火を点けた。

吐き出した煙が風に流されて、あっという間に消えてなくなった。灰を灰皿に落とした時、ふと思った。

そう言えば、この煙草も離婚原因の一端かぁ・・・

前原と出会った頃は、まだ、あの人だつてヘビースモーカーだったのに

前原と知り合つたのは19年も昔に遡る。

その当時の私は、まだ離婚経験はなく、それこそ前原のとき同様にその当時の主人の下で働いていた。名前は倉橋俊輔。私より13歳年上だった。

『だった』と、過去形なのは、4年前に糖尿病が悪化して亡くなつてしまつたからだ。

飲み薬・食事制限・インスリン注射・人工透析、入退院を繰り返し、仕舞には心臓にペースメーカー迄埋め込んだけど、結局、心臓の方がもたなかつたらしい。

寝ている間に逝つてしまつたようだから、もしかしたら、それ程苦しまずに逝つたのかも知れないけど、早過ぎたとは思えない。

離婚してから何年も経つての出来事だったし、向こうも私と離婚後すぐに再婚していた。何より、離婚してからのの方が友達感覚で仲も良かったから、倉橋に対する後悔は差ほどない。

敢えて掲げるなら、私に男がいたことをずっと知っていて、それでも何も言わなかったこと・・・

子供でもいたら、また、違つていたのかも

19歳の時、妊娠を期に倉橋と結婚しようとしたけど、入籍前に流産してしまった。

その後、私は妊娠することに恐怖心を抱き続け今日に至っている。

倉橋と前原は、共に家具職人だった。まるつきり別々の歩みをしてきた二人だったけど、お互いが勤めていた会社からの独立をきっかけに、大手建設会社の合同説明会で挨拶を交わしたのが付き合いの始まりだったようだ。

当時の私の仕事は主に事務処理。時にはデザイン画を描いたり、見様見真似で図面を引いたりもしたけど、事務所外のこととは殆ど理解していなかった。そしてまた、前原と直接会ったこともなかった。

歳も近く、仕事に掛けては双方一歩も譲らないといった職人氣質が、互いのやる気を一層熱くさせ、バブル最盛期の勢いも手伝って途中から提携を結んだらしいけど、奥の実情迄は私の耳には入って来なかった。

そもそも、あの二人ときたら

「今夜一杯どう？」なんて話にすぐ意気投合していたから。

男同士はみんな一緒？

個々の会社で仕事をこなすのは勿論、プロジェクトを組み共同で製作や現場での設置を行ったりもしていた。

私、25歳。

前原の会社から送られて来た手形に裏書きがされていなくて、私は電話を掛けた。

「はい、サイドシートです。」前原の声だった。
「アウルの倉橋です。いつもお世話になってます。」
「送って頂いた手形なんです。裏書きが無くて……」
「え、何やってんだ。内の経理は！」
「急ぐんでしょ？」
「ええ、まあ……」
「じゃあ、これから仕事で日暮里方面行くから、途中、日暮里の駅まで来てくれる？」
「はい。何時に行けば良いですか？」
「そうだな……2時でどう？」
「分かりました。じゃあ、東口の改札で2時に。」
「社長、どんな格好で来ますか？」
「黒のスーツに黒い靴。金縁のメガネかけてる。あと、多分、凶面、目一杯抱え込んでる。」
「ああ、じゃあすぐに分かりますね。」
「それじゃ、後ほど。」

初めての人に会うのって、毎回緊張した。
かなりの照れ屋。かなりのあがり症。そして、結構プライドが高い。
自分の恰好を^{あつた}検めて、まじまじと見た。
だめだ……こんな恰好で行けるわけない
いつものことだけど、Tシャツにジーパン。おまけにスニーカーで、しかもスッピン。

昼休みになったら、着替えに帰らなきゃ

始めに温めのシャワーを浴びた。温度が高いと汗がなかなか引かなくって、メイクに時間が掛かるから。
セミロングのソバージュは濡れたままハードスプレーをし、ドライヤーで固めた。

メイクも念入りに。ちょっとだけいつもよりマスカラを多めにした。

一番時間が掛かったのは洋服選び。箆笥の横まで姿見を移動し、30分はファッションショーをしたかも。

結局、ダークブルーに控えめなゴールドの四角い柄をあしらった、ちりめん地のスリーピースを選んだ。

さり気なく、ゴールドのネックレスをしてから、天井にコロンを3プッシュ。

その下で、静かに1回転。

ハイヒールはお気に入りの黒。8センチは背が高くなるから。身長155センチの私には、必須アイテムだった。

昼食を摂る間もなく、昼休みが終わった。

事務所へ行く途中のコンビニでサンドイッチを買い、デスク脇のソファでお腹に納めた。

午前中に飲み残したアメリカンコーヒーで精神安定剤を1錠流し込む。

よしっ！準備オツケー！

留守をアルバイトの女の子に頼み出掛けた。

追憶(2)

日暮里駅の改札口に付いたのは、待ち合わせ10分前だった。行き交う人々をあちらこちら眺めたが、『社長』らしき人は見当たらない。

待つこと15分。

あつ、来た

すぐに前原だと分かった。図面を抱えていなかったら、絶対やくざに見間違われているに違いない。

痺れてきていた足を宥めながら小走りで駆け寄り、改札に差しかかる少し手前で声を掛けた。

「社長！倉橋です。」

前原は私に気付き、歩み寄って来た。

「待たせた？」

「いえ、私も今さつき着いた所です。」

前原も私も、まだ改札の中だった。

「どこか、喫茶店でも入る？」

「どちらでも。」

前原が腕時計に目をやった。

うわっ、時計まで金ピカだ！

整髪剤のにおいがする。身長は170センチ位？それとも、もうちょっと高いのかなあ？

「お茶でもと言いたい所なんだけど、実はあまり時間が無いんだよね。ここで判、押しちゃつてもいいかなあ？」

「はい。それじゃあ・・・」私は、慌てて鞆の中から一枚の手形とスタンプ台を出し、改札ゲートの縁の上に置いた。

心臓がバクバクしてる

社長つて、カッコいいんだあ・・・

前原もセカンドバックの中から小さな革袋を取り出す。口元を開き、自分の左手の上で逆さにすると、中からゴム印と社判が出てきた。腕を上げた瞬間に、ボタンをしめていなかった背広の裏地が覗いた。赤い糸の繊細な刺繍柄が、玉虫色の生地には浮き上がっている。

完璧、やくざ？

でも、嫌いじゃないな・・・

幅10センチ程の狭いスペースの上で手早く捺印がされた。

「わざわざ、すまなかつた。」

「いえ、お忙しい所、こちらこそすみませんせした。」

「じゃあこれで。」

そう言うと、前原は足早に元来た方に戻って行った。

はあ、疲れた・・・

お茶は、地元の駅に帰る迄お預けだ・・・

電車は空いていた。

一番端の席に腰を下ろし、ぼんやりと移り行く車窓の景色を眺めながら、私は空想の世界へ入っていた。

着こなしと一緒に、性格も怖い人なのかなあ？

電話の声は結構高音だけど、会った時はそんなでもなかったな。テノール系？

確か、子供が3人いるんだった。奥さんはどんな人なんだろう？

夫婦仲、良いのかな？

今は、どの辺りにいるんだろう？

もう一度、会ってみたいな。ゆっくりと・・・

アイドル歌手や好きになる男優などに思い描く感情とはちょっと違った部分で、やけにさっきの情景が、何度も何度も繰り返し思い出

されてしよがなかつた。

胸の高鳴りとかとは別物だけど、そつけない口調も、ちよつとした仕草も、細めの指の動きさえ、その一つ一つが、何度も何度も繰り返し思い出されてしよがなかつた。

昼食のあとに飲んだ精神安定剤が今頃になつて効いたのか・・・電車の揺れがやけに心地良く、瞼が今にもくつつきそうだった。

ちよつとだけ、ほんのちよつとだけ

私はそれからの3駅、浅い眠りに就いていた。

あれから2カ月が経過し、5月も終わりも迎える頃、事務所に一本の電話が入った。

倉橋が受けたその会話の端々から、相手が前原だという事はすぐに分かった。

「ちよつと待つて貰えますか？」倉橋が会話を中断して、私に話しかけて来た。

「6月後半に、飲食店の据え付け家具があるらしいんだけど、俺、今の現場ずつと続くから、ひかるが受け持つてくれない？」

私は少し躊躇してから言った。

「私、一人で？現場のことなんて分かんないよお。」

「飯島いいじま、アシ(アシスタント)に付けるから！」

飯島ならしよつちゆう現場も出ているし、なら、大丈夫かな・・・

「前原社長が、私でも良いって言うなら、視みるけど。」

「もしもし、すみませんでした。内のやつでも、構わないですかねえ？飯島も一緒に行かせますから。」

「そうですね。それで、いつそうちに打ち合わせ、行かせれば良いですか？」

「はい。」そう言いながら、倉橋は送話口を手で押さえ、私に再度聞いて来た。

「明日の10時、神楽坂の現地で社長と待ち合わせだから。現調（現場下見）に飯島と一緒に行ってきて！」
私は頷いた。

「はい。じゃ、そういう事で。」倉橋は受話器を置いた。そして、
「おーい、飯島あ！」

隣の部屋にいる、飯島に声を掛けながら部屋を出て行った。

飯島 孝祐、23歳。まだ入社2カ月足らずの新人。

営業のアシスタントを主に、もっか現場実践の勉強中。

既婚者。子供1人。住宅ローンの残は34年。『BMW』^{ビエム}を乗り回す、傍から見たら『長身のイケメン』。

だけど、私はB型の人が苦手。

私自身、半分はBの血が入っているのに、どうしても構えてしまう。いつもいつも人の揚げ足を取って嘲笑されているかの様な気になるのは、何故だろうか？

まあ、年上だし、『社長夫人』の肩書も持っている。社員なのだから、一応は仲良くする姿勢を見せておかないといけないと思った。

19時。仕事を切り上げようとした時、鳴った電話に私が出た。

「はい、アウルです。」

「俺だ！」

すぐに、声の主が分かった。

「うん。」

「夕飯に出て来ないか？」

「いいよ！どこで何時？」

「8時にブルートでどうだ？」

相変わらず、パチンコか・・・

「分かった。じゃあ、あとでね！」

自宅に帰り、化粧を施し、濃い紫色のアンサンブルと黒のタイトスカートに着替えた。

夜、あの人に逢う時は、甘い香りのコロンを多めにつける。襟足・胸元・手首、そして腰回りにも。

自販機で、自分のと相手の分の煙草を2箱ずつ購入し、少しだけ早歩きで指定のパチンコ屋に向かった。

またきつと、帰るのは真夜中過ぎになるだろう・・・

追憶(3)

パチンコ屋の自動ドアが開いた瞬間、けたたましい騒音に苛立ちを覚えた。

元々、大きな音が苦手なのだ。

極平凡な核家族で厳格な父親を持つ環境に育った私にとっては、別に物静かだった訳でもないが、大声を張り上げるとか、大声で怒鳴られると言ったようなことは皆無に等しかった。

大きな音でも喜んでいた場所と言えば、映画館位の物だっただろうか・・・

学校内でも決して目立つタイプの類に入る人間ではなかった。

狭い通路を進む度、みんなに振り替えられる。

そんなに、通行人が気になるの？ほっといてよ！

恥ずかしくて、しょうがなかった。

早く見つけて、早く出たい。

ここに来ると、いつもその事ばかりを願っていた。

通路3本目でようやく探し当て、胸を撫で下ろす。

他の客同様、沢渡さわたりも首を横に向け私のことを一瞬見てから、又、台さわたりの方に向き直った。

沢渡さわたり 和郎かずろう、50歳。かれこれ3年の付き合いになる。

「出てる？」沢渡の両肩に手を置きながら聞いた。

「今日もやられていますよ！」明るく、おどけた口調だが、表情迄は読み取れない。

大体、いつも本気でやっているのかどうかさえ分からない。

そう、怒らせなければ、いつもはこんなに穏やか。

怒らせたりしなければ・・・

「もう少しで終わるから、ここに座つてな！」そう言いながら、隣の席の座面をポンポンと叩いたが、私は座らなかつた。その行動が何を意味しているのか、沢渡にはすぐに分かる。残りの玉を『早く無くなれ』と、言わんばかりに打ち込んでいた。

沢渡の後に付いて店の外に出ると、私は大きく一つ深呼吸をした。目の前のロータリーには、バスの順番を待つ人々が長蛇の列を成している。

私達は、それを横目に見ながら左に歩き始めた。

「一杯飲むか？」

「うん！」不愉快さは一掃した。

沢渡自身はあまり飲まないが、機嫌が悪くない限りは、私の晩酌に付き合ってくれる。

「鳥伊勢でも行つてみるか？」

「そうだね。いい魚入ってるかなあ・・・」

言わずと知れた、鳥料理がメインの言うなれば居酒屋である。

私はどちらかと言うと生ものを好んでつまみとし、沢渡は魚中心の焼き物・揚げ物で、『飲む』と言うよりは一杯目のビールを半分グラスに残したまま、食事を摂る事が多かった。

お互い、込み入った話はしない。

日常の出来事や仕事の話などを主体にし、二人の間の話は、敢えて避けた。

二人の最初の『決め事』である、『互いの生活に干渉しない』を、5年も実践し続けていたのだ。

そもそもの出会いは、倉橋が『親父』おやじだと言って家に招いたのが沢渡だった事に依る。

その頃まだ籍は入れておらず、同棲生活を送っていた。

当時18歳の私は、自分で言うのもおこがましいが『内助の功』を

發揮し、家事も仕事も一生懸命だった。

色々な料理本を読み漁っては、好き嫌いの激しかった倉橋に、少しでも喜んで食べてもらおうと躍起になったり、又、『美味い！』と、笑顔で答えてくれる事に喜びを感じ、『次はもっと！』と、意欲を燃やしたりもしていた。

今思えば、一回り以上年の違う彼女が可愛くて仕方がなかったのだろう。自分が尊敬する『親父』に、付き合ってる女が作った手料理を食べさせて、自慢みたいな紹介をしたかったのではないだろうか？

沢渡への第一印象は『おじさん』・『お喋り』・『よく食べる人』。そんな相手に対して、いずれ男女の関係になるとは想像するはずもない。

又、倉橋に於いても、私の浮気相手が『親父』以外だったら、打つ手を考えた事だろう。

だが、倉橋が沢渡の事を会社の『営業部長』に就任させさえしなかったら、私達が付き合う事は無かった。

いや、違った展開にはなっても、やはり付き合ったのかも知れない。

確かに、倉橋との生活には『安心』があった。

私が働かなくとも、楽勝で生活して行けるだけの稼ぎがあったし、生き様に対して、13歳分プラスされた賞録もあった。更に付け加えると、細かな事を一々言うような了見の狭い人間でも無かった。まさに、当時、私が求めていた『安心』だったのだ。

だが、結局、倉橋に対して最初に抱いた『止まり木』と言う感情を抜け出すことはなく、離婚する迄の11年間は、大きな喧嘩もせず流れ去った。

稼ぐ分、家に居なかった。

朝早くから、夜遅く迄、休日出勤も当たり前前の『亭主元気で留守』だった。

帰って来た時はいつも疲れ果てて、飯 風呂 寝る。
構って貰えない私は、次第に留守番だけの毎日に辟易し、友達を誘っては夜の町を遊び歩き、ナンパにさえ応じるようになっていった。そして、それは度を越し、友達さえも誘わなくなっていた。

明け方まで帰らない日が度々重なってから暫くして、沢渡から自宅に電話が入った。

「ひかるか？沢渡だ。暫く振りだな。たまには一緒にお茶でも飲まないか？」

何？いきなり唐突に・・・

「あつ、はい。」

「東口のモンブラン、知ってるか？」かなり古い喫茶店だった。

「はい、分かります。」

「じゃあ、そこで30分後に。」

「はい、伺います。」

訳の分からないまま、自転車を走らせた。

店に入ると、他に客は居らず、右の一番手前の席で新聞を読んでいる沢渡がやけに目立って映った。

軽く会釈してから向かいの席に腰を下ろし、私が座るのを待っていたかの様な素早さで来たウエイトレスに「アメリカン下さい。」と、注文を入れた。

「元気だったか？」

「ええ、まあ・・・」

「今日ひかるを呼び出したのは、俊輔から相談を持ち掛けられたからだ。」

何？相談って！

「この頃、ひかるが明け方迄帰って来ないんだけど、男でも出来たんじゃないかって！」

「自分から聞けないから、親父が聞いてくれって言うんだ。」

何で、この人から、そんな事言われなきゃいけないわけ？

「男なんていません。友達と会ってるだけです。」

「友達って誰だ？」

「中学の同級生です。」

「毎回毎回、同じ友達って言うのか？」

沢渡の目が一瞬にしてきつくなつた。

声には『ドス』が利いていた。

この人は、いったい何者？

「俊輔から連絡があつた次の日、3日前だ。俺は、ある人間にお前を見張るよう指示をしておいた。夜7時に出掛けたよなあ！」

私は顔色が変わつたかもしれない。目を見開いて沢渡の顔を凝視してしまつた。

「ん？お前、何処に行つた？」

「……私は、俯いた。」

「駅前で若い男と逢つたよなあ！えっ！それから何処行つた？」

「……」俯いたままでいた。

「まさか、最後迄俺に言わせるんじゃないだろうな！？」

もう駄目だ……

「食事して、それから……ホテルに行きました。」

「ここに、相手の名前と連絡先、書け！」

さつき沢渡が手にしていた新聞と赤いサインペンがテーブルの真ん中に置かれた。

教える気なんて、あるわけないでしょ！

「相手には関係ありませんから。」

「俊輔は俺の大事な息子よ！！それが、女房に男がいるかもって俺に泣きついて来たんだから、このまま見過ごすわけにいくまい！」

「俊兄にいとは、別れます。」

「寝ぼけた事言つてんじゃないやねえぞ！！息子の女房、寝盗られて、バシたら離婚だあ？」

「はい、そうですかって、簡単に済ませる俺じゃあねえよ！」

「俺がキれる前に、サッサと書いた方がいいぞ。キレたら、何するか分かんないからな！」

私は観念して、自宅の電話番号と名前を書いた。

こんな言葉つきも態度も、人生初だった。

その他、あれこれ言っていた様な気もするが、恐怖心で一杯の脳裏に焼きついた言葉はここまでが限界で、もう見つからない。

「暫くここにいろ！ちょっと出てくる。いいか、逃げ出すんじゃないよ！」

沢渡はやおら席を立つと、新聞を持って店を出て行った。

追憶(4)

沢渡が出掛けた合い間、自分の頭の中を整理出来ずに戸惑っていた。

連絡先を書いた新聞を持って出たのは、何故？

また、人を使って何かしようとも企んでるわけ？

『ヤキ』入れられてたら、どうしよう・・・

いつまでここに居させられるんだろう？

一体、これからどうなっちゃうの？

相手とは遊びだった。ただ、いつとき淋しさを忘れる為の手段に過ぎなかった。

と、言っても、誰でも良かった訳じゃない。

見ず知らずの人は怖い。

『浮気』を脅されはしないか？病気をうつされるたりはしないか？変態だったらどうしよう？妊娠でもしたら・・・なんて考えている私は、いつも知っている人しか相手に出来なかった。

相手にしても、別に私に対して『愛情』が存在している訳でもなかっただろう。

でも、お互いに、ベッドの中では『好き』と言いつつ合っていた。

戯れの最中のセリフに、重い感情など、持ち合わせてはいなかったから・・・

30分程経った頃、沢渡が戻って来た。

「相手の男呼び出したから、もう時機ここに来る。男の言い分も聞かなきゃならんからな。」

そう言って、煙草に火を点けた。

「なあ、ひかる・・・大人しく、俊輔の元に居る気はないか？」
「確かに、仕事馬鹿で面白味にや欠ける人間だろうが、あいつには、人が持つていない純粹さがある。男義だったら、誰にも引けを取らねえよ・・・お前の事もちゃんと守って行くだろうよ。」
「お前がやり直すって言っんなら、今回の事は俊輔に何も言わず、大目に見てやるのよ！」
さっきの恐ろしい剣幕は影を隠し、子供を宥めるような優しい表情になっていたが、目だけは真剣そのもので、決して微笑んではいなかった。

私が返答に困っていた時、入口の扉が開いた。

振り返ると、耕平こうへいの姿があった。

鈴木すずき 耕平こうへい、大学4年の22歳。

2年近く前、バイト先で知り合っていた。

同年の彼女がいるらしいけど、短大卒の彼女の方が一足先に社会に出て、今は長野の支社勤務で遠距離恋愛中とのこと。

向こうも淋しさを紛らわす『似た者同士』だったのかも知れない。

「鈴木君か？」頷いた耕平を見てとり、

「ひかるの隣に掛けなさい。」

耕平は困惑した顔つきで席に着いた。

「さっき電話で話した通り、二人の付き合いを認めるわけにはいかん。」

「この場でハッキリとした、二人の意思を聞かせて貰おうか？」

「・・・」

「鈴木君は、ひかるのこと、どう思ってるんだ？好きなのか？」

一瞬、間が開いてから

「好きです。」凜とした、冷静な声だった。

えっ！耕平、どうしたの？

彼女がいるのに、そんなはずない。

私は耕平の顔を見たが、耕平は沢渡から目を逸らさなかった。

「で、今後も付き合うつて言うのか？」

「……」今度は返事をしなかった。

「ひかるはどうなんだ？」

耕平の口から『好き』と言う言葉を聞いて、驚きと共に、もう後戻りは出来ないと思った。

一瞬にして耕平を『愛してる』気になった。

「私も、好きです。」

「俊兄とは別れたいと、思ってます。」

こんな強い感情など、持ち合わせてはいないのに……

沢渡は私から視線を外すと、今度は耕平に向かって喋り出した。

「ひかるは籍こそ入れちゃいないが、俺の大事な息子の女房よ！」

「その女房、寝盗られた挙げ句、付き合いたいだと？ふざけるのも大概にしろ！！」

また、口調が荒くなっていた。眼光も鋭い。

「俺が許すとも思ってるのか！？」

「なあ鈴木よお！お前は確か家族と同居だったよなあ？」

「お前ん家行つて、親に責任とつて貰つてもいいんだぞ！」

「学生身分のお前にや金なんかあるわけなからうから、親に代償して貰おうか！！」

「さっ、今から、一緒にお前ん家行くぞ！立て！！！」

大変、何とかしなきゃ。でも、どうすればいいのか、さっぱりわかんない

「親と今回の事は関係ないでしょう！」

私は無理とも思えるセリフを口にしていった。

「お前は、すっ込んでろ！」

奥で店の人達が集まって、こつちを見ているのが分かった。

「なあ鈴木、考え直したらどうだ？」

「まただ。また、あの、相手を宥める口調に変わった。」

「今なら、間に合うぞ……」

「息子が人の女房にちよつかい出した挙げ句、金まで払わされたら、親はどんな気持ちになるよ？よく考えてみる……」

「別れるよな……」

耕平に聴いていた。

「はい……」俯いたままだった。

「ひかるはどうなんだ？」

「別れます……」沢渡が涙で歪んで見えた。

悔しかった。

そして、

ほっとした。

こんな『おやじ』の言葉で、人生を左右させられるのが悔しくてならなかった。

大体、耕平は何故『好きだ』と言ったのかも腑に落ちない。

男としての責任からか、良心か……

これだけはハッキリしている。

耕平の『好き』は、決して『愛してる』訳じゃ無かったと。

でも、無事に事が治まって本当に良かった。

その夜自宅で、俊輔・沢渡・私の、話し合いの場が設けられた。今日の出来事が俊輔に報告されると、俊輔の表情に翳が落ちた。

「なあ、ひかる！今回の事はちよっとした火傷みたいなもんだ。」

「軽い火傷なんて、薬をつけりゃあすぐに治るさ。」

「俊輔も覚えとけ！もう終わった事だ。」

「今後、今回の件を、もし一言でも口にしたら、今度はお前に黙っちゃいねえよ！」

「縁あつて、一つの人生歩んでんだ。仲良くしろ・・・」

俊輔は約束を守り、私に対して二度と口に出すことは無かった。次の波はもっと大きいと、この時、誰も感じ得るはずはない。

追憶(5)

9時45分、『鳥伊勢』を後にして駅からタクシーに乗った。

私は、沢渡に注いだグラス1杯分以外のビールを空け、レモンサワーを3杯。

最も大好きな『ほろ酔い』状態だった。

いつも、敢えてこの状態に自分を持つていく。

この先は、とてもじゃないけど恥ずかしくって、素面まへでなんて向き合えないから。

厳密に言うなら、『恥ずかしい』だけでなく、『呵責の念』に少なからず胸が痛んだ。

夫である倉橋に背を向け、それだけならまだしも、倉橋が長年『親父』と慕ってきた人間との情事を冒すおか為には、曖昧になれる自分を作り出す必要性があった。

こんなこと、いい加減止やめなくっちゃ・・・

毎日の様に繰り返し思う感情も、いざ誘われると自分を食い止める事が出来なかった。

当時私は、沢渡に溺れていたのだ。

埼玉との県境にあるホテル街でタクシーを降り、お城を思わせる大きな建物に入った。

灯りの点いた部屋案内のパネルから1つを選んでボタンを押し、受付カウンターに行くと、カーテンで仕切られた薄暗いカウンターの中からルームキーが提示された。

「ご休憩ですか？お泊まりですか？」初老であろう女性の声に、

「泊まりで。」沢渡が財布からお金を出しながら答えた。

部屋番号が点滅するドアに鍵を差し込み、入ってすぐのスイッチに手を伸ばした。

外装とは程遠く、白を基調とした落ち着いた部屋。

私は浴室に向かい、熱湯のシャワーでバスタブの中を流してから、お湯をはりだした。

次に冷蔵庫からオレンジジュースとサワーの缶を取り出し、グラスと一緒に沢渡が座るソファの横に腰掛けた。

「はい、お疲れ様。」私は、ビールのグラスを沢渡の方に向けてから、一気に飲み干した。

まだ、終わってないけど……

沢渡は、女に事欠かない。固定の人だけでも、4、5人はいるのだろうか……

それもこれも、きつと沢渡が上手いからだ……

1時間半程戯れ、湯船につきり、それから又1時間……

愛撫は繰り返され、力強い腰の動きは止めどなく続き、私の意識が朦朧としたのが分かると休憩を挿^{はさ}む。

いつも沢渡は、先に私を湯船につからせてから、火の点いた2種類の煙草とビールのグラスを持って後から入って来た。

私にビールを一口飲ませバスタブのコーナーにグラスを置いてから、次に煙草をくわえさせ、自分は腰掛けに座る。

「姫、生きてるか？」

「なんとか……」

「今日、お前、危なかったんだぞ！」

「ん？」

「体半分ベッドから落ちてるのに、仰け反るから、床に頭打つかと思っただよ！」

「そうなんだあ……全く記憶にない……」

「だろうな……」

口の動き・指の動き・腰の動き・・・

それら全てが一体となり、私を幾度も波紋の中に引きずり込んで行く。

そして、私に留めを打つのが情事の最中に交わされる言葉のやり取りだった。

それまでの私は、ベッドの中で執拗に言葉を迫られた事なんて一度も無かった。

せいぜい、『好き』と返答する位のものか。

沢渡の巧みなリードは、私の羞恥心をいとも簡単に取り除いてしまふ。

気だるさの残るベッドの中、時計に目をやると3時を回った所だった。

俊兄は、もう寝てる頃だな・・・

「そろそろ、帰ろっか・・・」

「ああ、もう、お前の身体が持ちそうに無いしな!」

「おかげさまで・・・」

「ひかる、ごちそうさま!」

「こちらこそ、ごちそうさまでした。」

自宅の前で先にタクシーを降りた。

「おやすみ。」

「おやすみなさい。また明日会社で。」

走り去るタクシーが、信号を曲がって見えなくなるまで見送った。

5階の自宅の窓を見上げたけど、やっぱり灯りは点いていなかった。

寝てるに決まってるよね!こんな時間なんだからいつも思うこと・・・こんな日は、

灯りが点いていないとホッとす。

早々と寝ていてくれたら、もっと有難い。
そうすれば、時間なんて適当に誤魔化せる。

玄関を入るとそこに倉橋の靴は無く、辺りを見回したが何処にも帰って来た形跡は無かった。

まだ、飲んでるのかなあ・・・

今日は、誰と一緒になの？

私は、病気の身体で飲んでばかりいる倉橋の事が、さほど気にならなくなっていた。

追憶(6)

19歳の時、妊娠を期に双方の親兄弟と顔合わせをし、結婚式場も予約していた。

気持ちは前向きだった。

あの一件から、倉橋は少しだけ変わった。

前より、早めに仕事を切り上げ帰宅するようになった。

友達などと飲みに出る時は、私と一緒に連れて行くようになった。

そんなある日、妊娠初期の血液検査の結果を聞きに行くと、医師から風疹に罹っていた事を告げられ、重度の障害が出る可能性がある」と説明を受けた。

最初に倉橋に話したが、

「俺には決められない。ひかるの判断に任せるよ。」と言う。

それから何日か考えてみたものの、一人で結論を出すことは出来ず、両親に相談をしに実家へ向かった。

母親は、

「今回は諦めなさい。まだ、若いんだから。次は大丈夫だから。」
と言う。

そう、本当は『流産』したわけではない。

最終的に『中絶』を選択したのは誰でもない。この私。

手術の日、病院の待合室で母と二人、座っていた。

他に患者さんは居ない。

会話は殆どしなかった。緊張でいっぱいだった。

「琴野さん、こちらにどうぞ！」

古い町医者。

年期を思わせる木造の柱や棧に、黄ばんで見えるガラス達。

Pタイトルの床は冷たさを感じずにはいられなかった。

きつと、普通の定期検診だったなら、こんな風には思わなかっただろう……

もう二度とこんな目に遭うのは嫌だ！

それから半年が経過していた。

私は、結婚式場で着物の下着を身に付け、鏡の前に居た。

メイクさんから真っ白なおしろいと真っ赤な口紅が塗られ、文金高島田が被されている所だった。

結婚を止めることだって出来たはず。でも、何となく周りに流されていた。

別に『嫌』と、断る理由も無かった。

そして、この日の内に、婚姻届が受理され『琴野 ひかる』は『倉橋 ひかる』となった。

『晴れて』と言った感じは無い。同棲生活の延長に過ぎなかった。

私が21歳の頃、会社の経営状態は思わしくなかった。

当時、事務所にしょっちゅう遊びに来ていた沢渡は、何を血迷ったのかいきなり、

「俺が営業やるよ！」そう倉橋に行った。

「えっ、営業なんて出来んの？会社の仕事なんてやったこともないのに……」

「まあ、俺に任しとけ。大船に乗った気でいろよ！」

「ん……じゃあ、頼みます。」

肩書きは『営業部長』。沢渡が勝手に決めた。

私は何かって言うと、沢渡の営業活動に同行させられていた。

何故か、あの事件以来、私は可愛がられていた。

事務所に来ては、デスクに向かう私に、自分の話を面白可笑しく聞

かせていた。

他の従業員達と飲み会をしたり、倉橋が現場で遅い日は、二人で食事が出てら飲みに行ったりもした。

沢渡は饒舌だった。

自分が相手にしている女性の話を色々聞かせては、私の知らない世界へと好奇心を煽った。

「ひかる、知ってるか？主婦って、抱かれながら、頭の中では違う男を描いて抱かれてる事があるんだ。」

「俺、常日頃から女達に言い聞かせてんのよ。」

「なっ、俺に抱かれて俺の名前を叫んでると、旦那との夜のお勤めの時、間違って俺の名前を言ったらまずいだろ！って。」

「だから、俺といっても必ず叫びたくなったら旦那の名前にしろってね。」とか、

「この間、さすがの俺も毎回毎回だから言ったよ！“爪、短くしろ！”って。」

そう言って、沢渡はワイシャツの手首のボタンを外し、両腕を私に見せる。

そこには、あきらかに引つかかれたと思われる無数の生傷があった。

「背中から脇腹から、これだよ！」

「風呂入ると、結構沁みるんだぜ！」

こんな話に、身体の女の部分が熱くなったりした。

何度倉橋に、夜を強請った事だらう・・・

はたち
二十歳の頃、ソープにいた30代後半女性にえらく気に入られ、その人との一年間の同棲生活の中に於いて『女』と言う生殖動物の本能と性を、身を持って教え込まれたそうだ。

それを、手渡される小遣い元手に他の女に次々試し、その女性と別れた後も向上心は留まることなく、日々勉強の末に辿り着いたもの

は、『心』と言うエッセンスを加えることだったらしい。
沢渡に対して、女が身も心も如しいては人生まで投げ打ってしまったくなるのは、『心を伴ったの行動』に、その時だけは徹していたからだろう。

「ひかる、女つてのは身体だけ与えても駄目なんだよ。そこに『心』を入れてやって、始めて本気で燃えるんだ。例えばこうだ。」そう言ってあれこれ話し出した。

「一回戦の後が辛そうだったら、取り敢えず相手の好きな飲み物を抱き抱えて口に注いでやるんだ。煙草が好きなら、火を点けて口にくわえさせてやる。」とか、

「何でもない日に、花屋に寄って花束を買ってやる。普段冷たい俺が、そんなことすると泣いて喜ぶのよ。」とか、

「女の体調に合わせて、その日の強弱をコントロールするんだ？ どうした？ 調子悪いのか？ じゃあ今日は軽めにしとこうな？ って具合に・・・」

「もつとも、『軽め』だけで我慢出来た女なんて、今までお目にかかった例ためしが無いけどな！」なんて事を、サラっと言って退けた。

「ただ、多分、みんな知っていたと思う。」

「沢渡がどんな奴か分かっていても、きつと、離れられなかったのだ。」

《金の切れ目が、縁の切れ目》って。

「どれだけの女から、どれだけの札束が流れたのか知らないけど、『愛』を語らない沢渡だった。」

「普通だったら『愛してるよ』位のセリフはあつて当然だと思う。」

「でも、沢渡は決してそこだけは『勘違いすんな！』の世界だったらしい。」

「10年来の『恋女房』はいたけど籍は入れておらず、私は1回だけ

の面識しかない内に、その人は何処かにいなくなってしまった。それから何年も、沢渡はずっと探し続けていた。

元々は、ジャズバーのオーナーだったらしいけど、カラオケブームの波に遅れまいとスナックに転向したらしい。

『恋女房』をママに仕立て、自分は『マスター』。女の子も、常時4、5人はいたとか。

5年間その店を経営していた間に、客だった倉橋を含め、他の『親父』と慕う総勢12人の子供達を作ったり、外で引っかけた女達が入れ替わり出入りしていたりと、当時、女の数の多さには何処にも引けを取らず、それに群がる男の客達で大層な盛況ぶりだったらしい。

しかし、次第に沢渡の取り合いで女同士が店の中で喧嘩をしたり、自分の遊びの時間が無くなったりした事に徐々に苛立ちを覚え、その内、商売にも飽きが来てしまったと言っていた。

私が知り合った18歳の頃には既に無職だった。

あの事件に対する沢渡への『嫌悪感』や『恐怖心』は、無くなっていた。

日々接している内に、まず、頭の回転の速さに驚いた。

そして、常識も非常識も満載だった。

営業活動を通して、私の中に知識や教養・戦略法といったものを次々と植え付けていったりもした。

そんな沢渡を、いつしか尊敬するようにさえなっていた。

しかし、私が『尊敬』するのに対し、沢渡は25歳も離れた私に『女』を映し描いていたのだ。

その日、事務所ではバイトの女の子が休み、倉橋は飯島を伴って現場に行っていて、沢渡と私の二人きりだった。

いつもの様に、馬鹿げたとも思える沢渡の冗談話に耳を傾けながら帳簿をつけていたが、急に黙ってしまい、何の気なしに沢渡に視線を向けた。

遠くを見ながら何やら考えている様子に、

「どうしたの？」

「……」返答がない。

「何、急に……？」

その時、沢渡の真剣な眼差しが私に向けられた。

「なあ、ひかる。俺、変なんだよ。今、何を思ったか当ててみ？」

「そんなの、分かるわけないでしょ！」

「俺さあ、お前の事、抱きたい。」

一瞬、何を言ったのか意味が分からなかった。

「変な冗談言わないでよ！」笑いながら沢渡を見た。けど、

「そうなんだよ。俺、変だよな。でも、俊輔の事はちょっとこっちに置いて、今、お前を抱きたいと思った。」

「ひかるは俊輔の女房で、俊輔は俺に取っっちゃ可愛い息子で、そう考えたら絶対あっちゃあならん事を、俺は思った。」

「お前が男を作ったあん時は、正直言つて俊輔が可哀想で仕方なかった。何であんな出来損ないにイカレちまったのかって、腹立たしかったよ！」

「俺、あいつに言ったんだ。目を覚ませ！女はいくらでもいるって。でも、あいつはひかるがいいって譲らなかつた。」

「今なら、俺にもお前の良さが分かるよ。」

「お前は純粹だ。多少馬鹿な所はあるが、若さからくる馬鹿さだろ。年と共にそんなのは消える。」

「それに、甲斐甲斐かいがいしく俺の世話を焼くのを見てたら、忙しいのもいつとき忘れる程、心が和んだ。」

「どこにでも落っこつてる、そんじょそこいらの安っぽい女じゃあ

無かった・・・」

「俺が、本気で抱きたいと思った女は女房以来よ！」

「そんなこと、いきなり言われたって・・・。俊兄の『親父』でしよ！無理に決まってるじゃない！しっかりしてよお・・・。」

沢渡が煙草に火を点けた。それを見て、私も煙草を吸った。

何分経過したのか。

10分位の様な気もするし、1分だけの様な気もする。

口火を切ったのは沢渡だった。

「それじゃあこうしよう。」

「俺は、今すぐにもお前を抱きたい。しかし、お前の意思も考慮しなきゃならん。」

「もし、お前の答えがNOなら、俺は黙って身を引く。今後一切会社にも出入りしないし、お前の眼の届かない所へ行つて生きるよ。」

「でも、もしYESなら、いつとき俊輔イエスの事を忘れて、今の俺達の状況全てを忘れて、今からホテルに行つてくれ！」

私はどちらの返事も出来ずにいた。

まず、沢渡がいなくなる事を考えてみた。

今日迄の、共有した時間。

短い様で、実に中身の濃い充実した日常だった。

朝起きると、事務所に行つて沢渡が来るのを心待ちにしていたのかも知れない節があった。

一緒に食事をし、一緒に飲み歩き、その頃の私の生活と言ったら倉橋といるより沢渡といた方が長く、又、倉橋と在り来りな会話をするより、沢渡のその時々に応じた会話の方がはるかに新鮮で興味深かった。

その沢渡に、もう会えない・・・

「さあ、どうする。ひかる？」

「言つとくが、これは一生涯の秘密だ。俺は、墓の中迄持つて行く。」

「

私は立ち上がると、受話器を持ち上げ倉橋のポケベルに転送した。
そして、デスクの引き出しから鞆を取り出すと、

「行くよ！」と、沢渡に声を掛け、先に歩き出した。

もう、どうにでもなれ

壊れた日常の修復（1）

玄関のチャイムで我に返った。

いつの間にか山になっていた灰皿に、無理矢理、吸い掛けの煙草を押しつけて揉み消した。

足早に玄関の前に立ち、ドアを開けずに聞く。

インターホン位、付けてよ！

「はい、どなたですか？」

「ヨシダ電気です。ご注文の品をお届けに来ました！」

鍵を回し、ドアを開けた。

「大型商品だったんで、まだトラックの中なんです。これから上げますが、設置もご依頼されてるので30分程お時間見て下さい。」

「分かりました。」

これで少しは家らしくなる・・・

洗濯機・冷蔵庫・テレビ・掃除機が次々運び込まれ、言っていた通り、30分もすると全てが使えるようになっていた。

元々、前原と結婚して新居に移り住んだ時、殆どの電化製品を持って行ったから、まだ自分が使っていた物が全て存在していた。

「電化製品、持って行くんなら構わないよ！」と言う前原に、

「狭くって置けないから、みんな小さいサイズのを買う事にした。」と、嘘を吐いた。

極力、前の痕跡のない空間で、新たな出発をしたかったのだ。

『誰もが使っていた物』は、嫌だった。

『私だけしか使っていない物』のみ、持って出た。

日曜迄に、全部片さなくっちゃ・・・

取り掛かった事には『迅速に』がモットーの私。

片っ端から開梱し、それぞれの在るべき場所に納め始めた。

今ではネットで何でも簡単に購入出来る時代になったが、昔から人の買い物に付き合うのが苦手だった。

私は、行った先のフロアを一周して『即決』するのに対し、人は立ち止まってはあれこれと悩む。散々悩んだ挙げ句、

「他のも見てから決める。」の一言。

「これなんか、どう？」なんて、聞かないで欲しい。

自分の物でしょう・・・

「なかなか似合ってるよ！」

と言った所で、すぐに決まるわけでもない。

さつさと、買い物済ませてお茶したい。

だけどそれが、付き合っている人との買い物で、相手が

「これにするよ！」と言っても、

「そんなの、ダサ・・・」

「もつと良いのがあるって！」などと、平気で窘めてしまおう自分もいる。

母親や友人の物には無関心であっても、共に過ごす相手に対して、かなり私の嗜好が入っていた事は否めない。

どちらかと言えば、自分の買い物をするより、付き合っている人の物を一人で選ぶのが好きだった。

そして、そんな時だけは、自分自身納得の行く『嗜好の一品』を捜して何件でも歩き回った。

相手の笑顔を思い浮かべながら、料理を作ったり、アイロンを掛けたり、ベッドメイキングするのが好きだった。

休前日の夜、街に二人で繰り出して飲みながらお喋りするのが好きだった。

『女房』になっても『恋人』で有り続けたかった。

前原とだったら、そうやってずっと過ごして行けると思ったのに・・・

何故、結婚すると、次第に恋人同士でいられなくなるの？

私は家政婦じゃない。ちゃんと、一人の女として見てよ！
あなただけが疲れてるんじゃない。
いくら家事が好きでも、結婚に向かない女っているんだ・・・

大まかな荷物は仕舞い終わった。

引き出しの中身は追々整理する事に決めた。

折り畳んだ段ボール箱をナイロン紐で結び、玄関に運んでから掃除機掛けを始めたけど、5分もせずに終わってしまった。

前の家だったら、片付けながらの4階迄。優に一時間は掛かったっけ・・・

目覚まし時計に目をやると、午後1時を回っていた。

私は三日前の夜、前原から受け取った離婚届を鞆に入れ、区役所に向かった。

この辺りの出張所は悉く閉鎖され、自転車で20分程の庁舎迄行かなければならなかった。

炎天下の中、走り出したは良いけど日差しの強さに寝不足が重なって、今にも目眩がしてきそうだった。

どうにか辿り着き建物の中に入ったものの、冷房費の節約でエアコンはあまり効いておらず、届が受理されて帰る段になっても、まだ汗は引かなかった。

こりゃ、休憩だ・・・

離婚届を出す時、少しは心が痛むかも・・・

なんて思っていたけど、暑さの方が勝った。

近くにコーヒーショップを見つけ、小一時間を過ごしてから帰路についた。

エアコンのパワーを最大限に上げ、居間とキッチンを仕切るドアを

閉めてからシャワーを浴びた。
その冷え切った部屋のベッドに潜り込むと、直ぐ様、眠りに就いて
いた。

夢を見た。

そこには、険しい表情の前原がいた。
私を睨みつけていたのかも知れない。
時々何か喋っていたけど、ハッキリした内容は分からない。
ただ、表情を一切変えない前原に『もう好かれてはいないんだ』と
言う事だけ認識した。

携帯電話のコール音で目が覚めた。

居酒屋の大将からだった。

「もしもし・・・」

「何やってんだよ！みんな待ってるんだから！」

「今、何時？」

「もう8時過ぎだよ！何だ、寝てたのか？」

「うん・・・」

「呑気な奴だなあ・・・はよ来い！」

「支度するから30分後ね。」

夢の内容を思い出そうとしてみたけど、止めた。

所詮終わった相手。今更・・・

今回の離婚理由を、この『大将が好きになったから』と、自分の中
で勝手に決め込んだ。

店の常連さん達は、私が大将を好きだって気付いていた。
別に告白した訳じゃない。

でも、大将への接し方がみんなへのそれと違うのが、どうやらバレ
バレらしい。

善ちゃんにからかわれても、肯定も否定もしなかった。
然したる問題ではない。

前原と一緒にたての頃より8kgも太っていた私は、この店に行く時にオシヤレをした事がない。

いつもジーパンにTシャツ。

身体のラインが分かる服は極力避けた。

それは今夜も同様。

重たい引き戸を開けると、休前日らしい賑わいを見せていた。

「やっと来たよ！」大将の一声に、みんなの会話は中断となり、全員の視線を浴びる結果となった。

「お待たせです！」

誰が言うでもなく、カウンター席の中央が一つ空き、善ちゃんが椅子を引いてくれた。

「わし、もう酔ってしまいよった・・・」

「引越しの片付けし終わったら眠たくなっちゃって！」

ここにいれば、何も怖くない。

みんな、いつとき仲間。

誰も私を中傷したりしない。

店終いをしてから、大将とママに連れられママのお兄さんが経営しているとか言うパブにみんなで行った。

徒歩5分と掛からない距離。だけど、私は看板を初めて目にした。

マリンドールの看板には、白抜きの文字で『PUB シヤングリラ』と書かれていた。

へえ、こんなトコに、こんな店、あつたんだあ・・・

20畳程の店内。

カウンター席と、テーブル席が5つ。
壁には『古き良きアメリカ』チックな装飾品が所狭しと飾られていた。

ママが店のマスターを紹介してくれた。

「ぴかっち、これが私の兄。今後は使ってやってね！」

「ぴかっちって言うのか。宜しくな！はい、俺の名刺。」

『きのした 木下 紘亨』あれ？ママは『大田』・・・

「ねえ、何で、きょうだいで名字が違うの？」

「あつ、もしかして聞いてちやいけなかった？」

先に口を開いたのはママの大田おおた 美月みつきの方だった。

「私、結婚してるのよ！旧姓が木下なの。」

「えっ、そうだったんだ・・・」

「でも、秘密ね！あまり知らせてないのよ！！」

「う、うん・・・」

最初に？ママ？と声を掛けた時、？ママじゃないのよ！？と言われて、大将と結婚してないって事は分かった。おまけに大将もバツ1で、今は独身って知ったから好きにもなった。でも、ママが他の人と結婚していたとは寝耳に水。

まあ、女40歳なら当然と言えば当然か・・・ましてや美人だし・・・

女の色気はあまり感じないが、気風の良さは天下一品だった。

「なあ、俺の名前読めた？」いきなり、兄ちゃんの方が口を挟んできた。

「・・・無理！何て読むの？」

「これで、『ひろゆき』って読むの！わざと、ふりがな入れないんだ！」

「どうして？」そう言いながら、大将に目配せしていた。

大将は、他のみんなとお喋りに熱中していた。

「読めなきゃ、聞いてくんだろ？そしたら、こっちのペースだよ！」

店のオーナーなのに、この言葉遣い、何？
ちよつと苛ついた。

「マスターって、幾つ？」

「美月の1こ上！ぴかっちは？」

「はあ？客で、しかも、年上の私に・・・」

「44！」

「ぴかっち、中学どこ？」

「北弟3」

そう、ここは地元。2度目の結婚を期に地元に戻って来ていた。

離婚しても自分の地元を離れる気にはならず、家賃相場から元の家と差ほど距離のない場所に引越した。

「じゃ、俺の先輩じゃん！榎本君とか安田君とか知らない？遠藤君とかは？」

「面倒くせー・・・」

でも、その時のマスターの眼は輝いてた・・・

話が繋がった？常連になるとでも？だけど、ママの兄貴だしね・・・

「遠藤とはクラス一緒だった。安田はバレエ部だった子でしょ！榎本ってのは・・・知らない。」

話し終えるか否かで、いきなり、唄い出したのは大将だった。

この曲を唄い慣れているのが分かった。

始めて聴く歌声は甘く優しく、そして、切なかった。

「少しだけ訛りを感じた」

傍から見ているだけの『好き』は、少しだけ近距離の『好き』に変わった。

一軒目で、2時間ガンガン飲んで、かなり酔っ払っていたのだらう。

大将の後にいち早く近づこうと一生懸命だった私は、明らかに選曲ミスを犯した。

唄いながら、ぼろぼろ泣いた。曲が終わる頃には面影を追ってま

もに唄えていなかった。

所詮、私は泣き上戸のひかる。

健ちゃんを嫌いになったわけじゃあない！

健ちゃんが勝手に私を一人ぼっちにしたんじゃない！！

私は、別れて始めて泣いた。

その後、どうしていたのか、何時に帰ったのか、どうやって家に辿り着いたのか・・・
サッパリ覚えていない。

意識が戻ったのは、翌夕暮れだった。
着の身着のまま、窓も開けっ放しで、お膳の下に上半身を突っ込んで寝ていた。

今日は土曜日。どうやって長い夜を過ごそう・・・
大将の店は土日・祝日が休みだった。

しょうがない。古巣に返り咲いてみるか・・・

店名は『今井』。親子で営んでいる、小料理屋だった。

曇りガラスの入った格子戸を開けると、この中にも知っている顔の常連さん達が居た。

「お久で〜す！」

「いらっしやい！ホントご無沙汰だったじゃない。」変わらぬママの声に、ホッと安堵した。

大将の店に通うようになってから、ここには一度も顔を出していなかったからだ。

奥のテーブル席に座り、他愛のない世間話をしていた時、携帯が鳴った。

えっ、大将？

「もしもし？」

「何してんの？」

「家の近くで飲んでるとい。」

「一人？」

「そうだけど。」

「行ってもいいかなあ？」

「全然構いませんよ！」

15分程で大将がやって来た。

アイボリーのジャケットに黒のスラックス。VネックのTシャツらしき服も黒だった。

背はそんなに高くないけど、引き締まった身体つき。

日頃から体力作りをしているだけあって、実年齢よりも、かなり若く見える。

普段は毒舌だらけなのに、繊細な仕事ぶりやさり気ない優しさ、それに、野球のナイター中継や古い映画のストーリーに熱弁を揮う無邪気さ。

そんな大将の事が私も好きだった。

そもそも、私は歳の離れた人にしか興味が湧かなかった。それも、かなり上の人にしか。

「岡本さん、いきなりどうしたの？びっくりした！」

「いや、昨日のひかる、呂律ろれつが回ってなかったし、大丈夫だったかなと思って電話したら、飲んでるって言うから・・・」

「俺も、掃除と洗濯終わって暇してたし！」

何か、くすぐりたいよ。

店以外では『大将』と呼ばない事を、昨夜みんなの会話から知った。『ママ』も『ママ』ではなく『美月ちゃん』に代わっていた。そういうものなんだと、私も自然なに做なった。

だから今夜は、私の事も『ひかる』なの？

鯨の塩焼き・ほうれん草のお浸し・出し巻き卵を注文し、大将の話に耳を傾けていた。

ここに移って来る前の店の話とか、板前の修業時代の事とか、或いは浮名を流していた頃の武勇伝なんかも・・・

一瞬の沈黙が流れた。そして、大将が腕時計に目をやると、

「カラオケでも行くか？」

「そうしますか・・・」

その店を後にし、タクシーに乗り込んだ。

私が離婚する迄は、こんなこと、一度も無かったのに・・・

今日の大将は、いつもと雰囲気が違う。外にいるせいかなあ？

大手チエーンのカラオケBOXに入った。

今夜の大将はよく飲む。

お酒、弱いのに・・・

私もつられて同じペースで飲んでいた。

そして、『ほろ酔い』の私がトイレから戻り大将の横に座ると、視線が絡まってしまった。

私はふざけ半分、酔った勢い半分で、大将に軽いキスをした。

次には笑って、『ほんのジョークよ！』と言うつもりだった。

でも、離れた唇は、今度は大将の方から重ねられた。

肩を抱きしめる腕からも、優しいのに熱いキスからも、かなり手慣れているのが分かった。

そして、いつしかそれに応えずにはいられなくなっていた。

頭の中が、大将一色になった。

「家、来るか？」

「うん。」

タクシーで10分の間、二人に会話は無かった。

壊れた日常の修復(2)

大将の家は、店から自転車で5分程の距離の所にあった。
マンションの7階。

2DKの部屋は、整然としているせいか、男やもめには広過ぎると思っただ。

畳敷きの居間には、テレビが乗ってるローボードとテーブルしかなく、開け放たれた引き戸の向こうにはフローリングの床に少し大きめのベッドとサイドテーブルだけが置かれていた。

「随分、生活感の無い部屋だね！」

「殆ど店にいるからな・・・」

「何、飲む？」

「お酒の類、何かある？」

「いつもの焼酎で良いか？」

そう言っただキッチンに立つと、手際良くウーロン茶割らしきグラスを二つ、手に抱え戻って来た。

「岡本さん、まだ飲むの！？」勢い余って言った。

「バカ！俺のは酒入ってないよ！」

良かった・・・大将が二日酔いだと、いつも機嫌悪くて周りの気が滅入るトコだった。

「家で飯作ってないから、つまみは無いぞ！」

「全然平気・・・」

吸い殻がいっぱい。私と同じだ・・・

ベランダには、今日洗ったと思われる洗濯物がたくさん干されていた。

「一人暮らして、寂しくない？」

「風呂入って寝るだけの空間だから、どうってことないよ！」

「俺の大好きなテレビはあるし、エロビも観れるし！」

エッチなビデオに無関心だって分かったのは、それから半年も後の事だった・・・

「俺、シャワー浴びてくるから、ちょっと一人で飲んでな！」そう言ってテレビを点けると、リモコンを私の前に置き部屋から出て行った。

吸い殻をゴミ箱に捨てようとキッチンに行くと、左脇の浴室からシャワーの音が聞こえてきた。

結局、付いて来ちゃったよ！これっていいのかなあ・・・

好きな人にあんなキスされて、帰る気になんてなれなかったし・・・

でも、別に大将は私の事、何とも思っていないんだろうな・・・

まっ、いいか・・・お互い独り身なんだし・・・

暫くすると、短パン姿で現れた。

上半身は裸だった。

首にバスタオルを掛け、いつものオールバックの髪は濡れて瞼の辺り迄あった。

「ひかるも浴びる？」

「うん・・・」

「これでいいよな！」そう言いながら、首のバスタオルを軽く放り投げた。

浴室もきれいに掃除されていた。

へえ・・・案外、几帳面なんだ・・・

店の中は、お世辞にも綺麗とは言いがたかった。

壁の染みも床の隅の埃も、常連客にとっては然したる問題ではないが、たまに訪れる人にとっては決して好印象ではないと思う。

今日掃除したって言うてたからそれで綺麗なのかなあ・・・

ロンTだけ身に付け居間に戻った。

深夜のスポーツニュースでゴルフの順位表を掲げているテレビをじつと観ながら、

「サツパリしたか？」

「うん。どこもかしこも綺麗にしてるね！」

「掃除、好きなんだよ！」

「もつとも、週末しかやらないけどね！」

大将が隣室に向かった。

そして、ベッドの布団をめくると壁際の方に寝転んでこつちを見た。私はあれこれと言葉を探したけれど一向に出てくる気配は無く、観念したのか或いは待つていたのか、さも促されたかのように、黙ったまま居間のテレビと照明を消して後に続いた。

カーテンを閉めていない外からの月明かりだけが、互いの位置を明確にした。

「脱いで……」

「自分は？……」脱ぎながら聞いたけど、大将は右腕を伸ばしただけで私の要望には応えてくれなかった。

枕の無い右腕だけの傍らに掛布団と一緒に横になった時、瞬時に掛布団が捲めくられた。

大将の視線は、明らかに私の身体を舐めまわしていた。

私はこの段になっても、まだ躊躇ちゅうそしていた。

何か、喋らなくっちゃ！！！！

そんな私の思いなんかつゆ知らず、乳房から太もも、そして次には秘所迄、徐々に手を這わせていった。

指先が密林を侵入してきた時、思わず嗚咽めいげんが漏れた。

ダメダメ。ひかる！何か喋らないと！

だけど、その指先が徐々に奥へと進むにつれ、いたずらっ子のように右往左往を繰り返す指先に翻弄ほんりやうされた。

滴しずくが洪水こうすいに変わる……自分でも分かった。

そして又、『自分は弱者』なんだと思い知らされた。

次第に腰は反り返り、呼吸も荒くなっているのが分かった。

「天井棧敷か・・・」静かな声が、確かに耳に届いた。

「どうやらそうみたいね・・・自分じゃ分からないけど・・・」かす擦れた声の私・・・

指先の動きに呑み込まれぬようと、頭の中だけは必死でもがいているのに、私の身体は何と正直な事か・・・

男性にとっては一種憧れの存在らしいが、私自身はどうでも良かった。

『天井棧敷』と言う言葉は、昔、沢渡から聞いていた。

喋るなら、今？

「昔、付き合ってた人が同じこと言ってた・・・」

今にして思えば、何とくだらない発言をしたものか・・・

でも、その時は無我夢中だった。

尚も奥を淡々と弄ぶ指先に『好きな大将』は『愛する人』に変貌していた。

「ねえ、きて・・・」

「お願いだから・・・」

懇願とも思える一言・・・一言・・・

でも、大将のそれに触れた時、現実を・・・

そして、我に返った。

お酒のせいかな、歳によるものか、はたまた、私に魅力を見い出せなかったのか・・・

そんなはずは・・・嫌っ！・・・

短パンと一緒にトランクスも下ろして顔を近づけ様としたけど、両手で脇を抱えられ、自分の胸元まで持ち上げられてしまった。

大将は黙って私の肩を抱いていた。

「なんで？」私はその場に起き上がって聞いた。

「ねえ・・・」大将の胸元を揺すった。

それでも、眼を瞑ったまま腕を組み、返事は無かった・・・

私が着替えようとベッドを離れた時、

「眠たいなら、寝ていけば？」相変わらず、眼は瞑ったままだった。

「ううん、帰るよ・・・じゃあね・・・」

大将がそれ以上、私に意思を示すことはなかった。

帰り道、色んな方向性から答えを見つけようとしたけれど、所詮は無理だった。

歩きながら、胸の痛みに涙が溢れた。

遊びでも、抱いてくれてたら、今ここにこうしていなかったのに・・・

お酒のせい？私のせい？

この次、どんな顔をして会えば良いの？

壊れた日常の修復(3)

とうとう寝付けず朝を迎えてしまった。
ずっと、夜の情景を思い浮かべていた。

58にもなれば当然か・・・

当然だとしたら、何故私を誘ったのか？

やはり、お酒の勢いだったのだろうか？

泣き腫らした眼を冷たいタオルで冷やすこと30分。

何とかメイク出来る迄に回復した。

離婚してからの、出勤初日。

弛んだ姿勢で臨む訳にはいかなかったのだ。

やる気の無さを見せたら、？もう来なくていい！？と、言われ兼ねない。

事務所迄は自転車で10分程の距離だった。

9時8分前に到着したが、前原は既に来ていた。

中央の出入り口に対し、前原と他の社員のデスクは左側に、私のデスクは右側に配置されている。鰻の寝床の様な、横に細長い17畳程のスペースだった。

經理の仕事上、あまり人に見られない方が良いとの考えで、前原は昔から經理のデスクだけは孤立させていた。

でも、私的には個人の思いが他にあった。

仕事をしながら、煙草の吸える空間。

仕事をしながら、音楽の聴ける空間。

だから、4年前この事務所に移転した際には、自分の空間のみパーティションで仕切ってしまった。

事務所内での喫煙場所は、私の部屋とキッチンの換気扇前だけだった。

パソコンの電源を入れ、メールのチェックをしていると前原がノックしてドアを開けた。

「この一ヶ月間の納品書、全部見せて！」淡々とした口調だった。

一冊のファイルと未処理伝票を引き出しから出すと、

「これで、全部です。」そう言っ手渡した。

ざっと、それらに目を通すと、

「『グッドサプライ』の伝票は？」

WEBサイトのいわゆる文房具店だった。文具の他に、日用雑貨や食品・家具等も

扱っている。

「無いですか？注文してるから、納品書あるはずなんですけど・・・

「でも、請求書に内訳がみんな載ってますから、納品書が無くても問題ないですよ。」

なぜ、『グッドサプライ』に拘こたわっているんだろう？

現場の仕入れで利用した覚えは無い・・・

だけど、ただでさえ機嫌悪いのに、それに輪を掛けてもなあ・・・

不能に思われるのが嫌で、再度、未処理伝票の入ったクリアホルダーの中を捜し出した。

あつた！

早速、前原のデスクに向かい、

「ありました。」

前原は内訳を確認すると、他の伝票の上に放り投げた。

何なの？

それから、一時間が経過していた。

再び、前原がノックする。

「ちよつと話があるんだけど、こっち来てくれるかな！」

ミーティングテーブルの椅子に座る前原の正面に腰掛けた。

「何ですか？」

「随分、会社通して仕入れしてたみたいだけど、そこら辺どうなってるの？」

今朝の意味不明な行動に、全て合点がいった。

要は、『私が会社名義で散々物を買った挙げ句、支払いをしないで辞めるつもりだ。』と言う事だろう。

冗談じゃない！

怒りが込み上げた。

そんな汚い真似なんかしないよ！

でも、もう諍いは御免だった。静かに残り半月を全うしたかった。

私は自分のデスクに行き、引き出しから一つの請求書を取り出すと、それを持って前原の下へ戻った。

「会社で買った物は全て自分宛の請求書を作成して、先週銀行に振り込みも完了しています。」

言いながら、前原に内訳明細の部分を開いて見せた。

「なんなら、銀行の口座照会もしますか？」

「分かった。」それ以上、何も言わなかった。

そつちが、そういう態度なら、私にも聴きたい事がある。

「ところで、退職金って出るんでしょうか？」

「出ない。今迄高額な給料を払って来たんだから。」

「それに辞めても、半年間は失業保険が出るでしょ！」

「私の場合、経営者の家族なので労働保険には加入できないんです！」

「だから、失業保険も貰えません。」

「とにかく、会社からの支払いは無い。」

「今回の事で、俺の方は杉田弁護士立てであるから、何かあれば杉田さんに連絡入れて！」

もう、何も言う気になれなかった。

変われば変わるもんだ・・・

大体、『高額な給料』って何？殆どが生活費に消えるって知っ

てたくせに！

引き継ぎの為の残務処理が続いていた。

前原も他の社員もさつき帰り、やっと緊迫した一日が終わったように思えた。

煙草をゆっくり吸い込んで、ため息混じりの煙を吐いた。

今夜はまっすぐ帰ろうかな・・・

でも、大将の顔、見たいしな・・・

大将が変わってたらどうしよう・・・

ぼうつと時間をやり過ぎ8時半になって退社した。

ペダルを漕ぎながらずっと悩んでいたけど、結局、『日向』の前迄来てしまった。

『日向』とは大将の店の名前。

宮崎の生まれ故郷から付けたらしい。

入り口で、まだ躊躇ためらっていた。

自転車の止め方を変えてみたり、締め終えた鍵をチャラチャラ鳴らしてみたり・・・

でも、その時救いの主が現れた。大ちゃんと森尾さんが連れだつてやって来た。

二人共、オープン当初からの常連さん。

何とかなつた・・・

二人と一緒に居れば良い・・・

そうすれば、大将がもし私を無視しても平気なフリが出来る・・・

「お晩です！」私から口火を切った。

「あらお嬢さん、随分遅いご出勤じゃなくい？」森尾さんは、時々女っぽい言葉を使って、おどけて見せる。

6人きょうだい中、男は森尾さんだけ。しかも末っ子で、お姉ちゃん達と過ごした少年時代に自然と女っぽい言葉を習得したらしい。もつとも、結婚して30歳を超えた息子さんらがいるから、中身は完全に男なのだろう。

「今、仕事、片付いたんですよ！」

「二人一緒なんて、珍しいですねえ。」

「そこで、偶然会ったんだよ！」大工の見習いで『大ちゃん』。これも、善ちゃんが突然言い出したあだ名。

大ちゃんがドアを開けて中に、そのあとを森尾さんに勧められたが、右手で『どうぞ』の仕草をして見せると、森尾さんが先に入った。続いて、私も恐る恐る入る。

「らっしや〜い！どしたの？珍しい組み合わせじゃない」いつもの大将だった。

「今そこでバツタリだよ！」大ちゃんがカウンターの奥の席に座りながら答えた。

「さあさあ！レディは真ん中にどうぞ！」森尾さんの声に、

「どうもです〜！」私は森尾さん用の椅子を引きながら腰掛けた。

「今夜は閑古鳥が鳴いてたの！」ママが奥から出て来た。

「もう店閉めようと思って、飲み始めちゃったよ！」そう言つと、大将はいつものビールジョッキに焼酎を足した。

大丈夫そう・・・

まだ、話し掛けるのは怖いけど・・・

今日が平気なら、明日からはもっと平気になれる。

そう思っていたのに・・・

その日から三日後、先に来ていた善ちゃんと森尾さんにかかわれた。

「ぴかっち、大将と何かあったらしいのじゃないですか〜？」

善ちゃんの顔が、にやついている。

「えっ、何かって何？」

森尾さんを見ると、同様に知っているのが分かった。

「だからあ、大将ん家行つたんでしょ？」

一瞬にして、頭が真っ白になった。

大将が喋つたんだ！

どこ迄？

私は、白を切った。

「別に、カラオケ屋のあと行つたけど、一杯飲んで帰つたよ！」

「ホントにいい？それだけえ？」

「何もあるわけないでしょ！」

「大将は、あれこれ言つとつたけどなあ・・・」

「酔っ払いのジョークを、いちいち真に受けないですよ！」

「そない言っんなら、そういうことにしときましょ！ねえ、森尾さ

ん！」

カウンターの中で大将は料理を作りながら、確かにその話を聞いていた。

でも自分が口を挿む事はなく、その後話題はプロ野球に移っていた。

自宅で0時の針を確認し、大将の携帯に電話した。

「もしもし」

「どういっつもり？」

「なんで善ちゃんや森尾さんが知ってるの？」

「ああ、昨日酔っ払って話しちゃったかも！」

「ふざけないですよ！人に言いふらすなんて、あり得ないでしょ！！」

「他の人にも、話したの？」

「あの二人だけだよ！ごめ〜ん」

「ごめんじゃないわよ！！」

「兎に角、今後一切喋つたりしないでね！」

「それから、あの二人に何か聞かれたら、？冗談だよ？って言うてよね！」

「わかった。また、明日な！」

電話を切っても、怒りは治まらなかった。

それから、何杯^{あお}煽ったんだらろう・・・

何もかもが汚く見えた。

前原といい、大将といい、この頃ムカついてばかり・・・
どっか旅行でもして、のんびり温泉三昧したいな・・・

外は横殴りの雨だった。

この雨と一緒に、あの二人の記憶も流れてなくなればいいのに

そう願わずにはいらなかった。

壊れた日常の修復（4）

残りの十日余りをあくまでも冷静を装いながら勤務を全うし、新たな就職先も探さぬまま四カ月が経っていた。

大将は当然の事ながら、善ちゃんも森尾さんも、あの日を境に例の話には何一つ触れなかった。

いざ一人で旅行に行こうと考えても虚しくなる一方だったし、みんなと飲んでいる内に忘れ去ってしまう位のいい加減な感情だったのかも知れないとも思う。

夕方に起き、シャワーを浴びてから『日向』に出向く日常が、至極当たり前前様になっていた。

『日向』で意気投合した、その日の飲み仲間と連れ立って『シャングリラ』に繰り出すのも日常茶飯事だった。

この四カ月間の当初、私は大将に対して《お前は馬鹿か！》とも思える行動をとって来た。

仕事が終わって帰宅する大将を家の前で待ち伏せしたり、真夜中に電話を掛けたり、絵文字だらけのメールも・・・

大将は、ウーロンハイ3杯がちょうどいい。

家の前で待っていた私を宥めるようにキスしてくれる。

それ以下だと真面目に困った顔をし、

それ以上だと語尾がきつくなり、仕舞には叱り出す。

そして、都合二回振られた。

一度目はちゃんと告白した。

「好きなんだってば・・・」

「私じゃ、ダメ？」

「ダメとか、そんなんじゃなくてえ……」

「誰か好きな人でもいるの？」

「……」

「もしかして、ママ？」

「……ああ、そうだよ！！これでいい!？」

私から視線を逸らして言った。

吐き捨てる様な、投げやりな口調だった。

それが三か月前の出来事。

泣くだけ泣いた。

飲めるだけ飲み干した。

そして、二日酔いの気持ち悪さを洗い流すように私は降りた。

ひかる……好きな相手がいるんならしょうがないよ……

お前はいつまでも引きずるような女じゃないだろ……

でも、なんでわざわざ旦那のいる人を……

？はずだった？

そう、確かに

？降りたはずだった？

きれいサツパリ《飲み屋の大将》に感情を戻したのに、つい半月前、訳のわからぬ振られ方をした。

その日、『日向』に残っていた常連さん達と大将・ママで『シャングリラ』に繰り出していた。

ママは何やら『シャングリラ』のマスターときょうだい喧嘩をしたらしく、自分の支払いを済ませると先に帰ってしまった。

それから何曲かのカラオケが終わった辺りで常連さんと大将も帰った。

私は、いつも一人閉店迄残っては、覚束ない足取りで帰る始末。^{おぼつか}
ただ、その日だけは違っていた。

『シヤングリラ』のママが外に大将達を送って戻ってくると、
「ぴかっち、帰らないの？」

「岡本さんが外でぴかっちの事待ってるよ！」

私は、一瞬呼吸が止まり、身動きも出来ず黙り込んだが、すぐさま
立ち上がると会計を済ませ階段を駆け上った。

斜向かいの駐車場脇で自販機に寄り掛かりながら、どうにかこうにか
立っているのが分かった。

何で待ってたんだろ？

あゝあゝ、相当酔ってるよ……

近くに歩み寄りながら、

「大将、何してんの？」

「あのさあ、ハッキリ言つて、俺、ママの事好きだから！」

「知ってるよ！前に聞いたじゃん！」

「だから、無理だから！」

「分かってるって！何で改めてもう一度言っわけ？」

「普通に、客として店に行ってるだけじゃない！」

「もう、いい加減自分の感情は捨ててたのに、何で今更……。」

「分かってるんじゃない！じゃ、おやすみ。」

そう言つと、大将はふらふらと自宅方向へ歩いて行った。

何で、も一度振るわけ？

意味不明

でも……落ち込んだ……

その後の記憶は無いに等しいが、店に戻って飲み直したのだけは覚えて
いる。

後日、マスターから聞いた話によると、泣きながら演歌を熱唱して
いたらしい。

やっぱり《泣き上戸のひかる》は、いつまで経っても変わってはいれない……

感情移入が激しいのだ。

『シャングリラ』の常連なら既に誰もが知っている公然の事実。

「ひかるは、いつもモニターに向かって泣いてるよな！よく毎回毎回泣けるよ！」

マスターは、いつの間にか私の事を呼び捨てにするようになっていた。

だけど、別に嫌な感情は湧かなかった。

多分だが、《親しみを込めて》みたいな類のものだろう。

常連の女の客に対して、《さん》とか《ちゃん》などと付けて呼ぶ人は、明らかに年上か、上役の連れ以外にいなかったから。

今日は『日向』に行かず、8時のオープン時刻に合わせて『シャングリラ』に直行した。
私が一番乗りだった。

カウンター席に座り、中に居るマスターと二人だけの時間が流れて行った。

「ママって、マスターの奥さん？」

「んなわけないだろ！！」

「昔からのダチっただけだ！」

「えっ、じゃ奥さんは？」

「去年別れた。」

「へえ、理由は何？」

「性格の不一致！」

「面白味の無い答え……」

「離婚が面白いわけないだろ！」

「やっと、苦痛の日々から解放されたよ！」

「俺にも、こんな楽な人生があったのかってね！」

「だよねえ・・・」

「もう、結婚は懲り懲り」

そっか、独り身なんだ・・・

この感情が、後々の自分を左右するなんて、考え付くはずも無かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4855o/>

「愛してる」を言い訳に

2011年1月22日13時30分発行